

月刊

中東レポート

第 97 号

発行 ウニタ書舗
 東京都千代田区神田神保町1-52
 TEL (03) 3291-5533

編集 J. R. A.
 郵便振替 東京1-48443
 三菱銀行神保町支店 当座 9012656

会員制 年会費 24,000円

地に足の届かない自治交渉

一九九四年一月一〇日

九月一三日の合意調印の後、ラビン首相は、
 △書面の上の合意は穴だらけであり、それを現
 実的なものにするのはこれからの作業である▽
 と語った。調印前後は、パレスチナ人内部でも
 イスラエルでも圧倒的多数が合意△和平に期待
 し、支持を表明していたが、実際の第一歩を踏
 み出す前にそうした状況は逆転した。

自治交渉は停滞し、一二月一二日のアラファ
 ト議長△ラビン会談で、撤退の開始の延期を決
 定するに至った。とは言うものの、△一〇日後
 に再度会談する▽と発表されたように、それは
 あたかもほんの少しの延期であり、四月一三日

の撤退完了は決して動かすことはないかのよう
 に報道された。だが、交渉はさっぱり煮詰まら
 ず、いまや、はたして合意なんてあったのかと
 疑いたくなるほど、あいまい模糊としたものにな
 っている。

そうしたなかで、やはり包括的な和平でなけ
 れば問題を解決することにはならないという意
 見が圧倒的になり、一月一六日のアサド△シリ
 ア大統領とクリントン大統領のジュネーブでの
 会談が、中東和平に新たな活力を与えることへ
 の期待が大きくなっている。

今号では、そうしたところに焦点をあててみ

目次

地に足の届かない自治交渉..... 6 1

資料.....

- 抵抗と挑戦のよびかけ
- PFLP二六周年記念集会報告
- インティファダ七年目の記念声明(二つ)
- パレスチナ経済はイスラエルとの分離を
- 自治の違いと撤退の遅れ(抄)
- パレスチナ難民がスカンジナビアに(抄)
- 帰還する英雄たちのことは
- シリアのラビエ・在シリア・ユダヤの自由は
- 保証されている

「中東市場」はアラフの分析

重要日誌(一九九三年二月二日、一九九四年一月一〇日) ..: 15

たい。

一 自治の開始はまったく見通し立たず
 PLOとイスラエルの合意文書では、一二月
 一三日がイスラエル軍の撤退開始であった。が、
 ラビン政権はこれの引き延ばしを策動してきた。
 これに対してアラファト議長は、△合意の日付
 は神聖なものであり、これを守るべき▽と何度
 も繰り返した。

一二月一二日、カイロで両者の会談がなされ
 た。△ひよっとしたら、アラファトは大幅な譲
 歩を行ってでも、翌日からの撤退開始を実現さ
 せるのではないか、他方のラビンも強行姿勢を
 とっているが、将来のアラブ諸国との関係を作
 るためにも、妥協点を見出すのではないか▽、
 といった観測もあった。が、撤退開始の延期、
 一〇日後に再会談することでの合意というまっ
 たく進展のないものであった。

アラファト議長は、失意を隠しきれないなが
 ら、△アラブユダヤの対立の歴史から見れば

たいしたことではない。一日後からは撤退が開始されるVことを強調した。他方のラビンも、△撤退開始は(多少)遅れるが、それは四月三日の撤退完了に比べれば、それほど大きな問題ではないVと語り、合意そのものの基本は崩れてはいないことを強調した。

中心の問題は、国境の管理、ジェリコ自治区の規模、入植地の警備の三点であるという。国境の管理では、イスラエル側は、△パレスチナ側にそれを任せることになれば、テロリストの浸透を防ぎきれない、対外的な安全保障はイスラエルの責任であるVと主張する。これに対して、パレスチナ人の通行に関してパレスチナ当局が管理するというのが合意の内容であったし、イスラエル側の言う「テロリストの浸透」には文書や金までも含まれており、これでは自治当局の活動までも管理されることになる、と対応する。

ジェリコの規模では、ジェリコ市だけなのかジェリコ地区なのかで、双方の主張に一〇倍近くの差があった。一定妥協が計られてきているという報道があるが、△ジェリコ地区を分割することに合意すれば、将来の交渉においても地区や市の分割を認めるという前例になる。これでは、「エルサレムはイスラエルの首都」と繰り返すイスラエルの主張に道を開くことになるし、将来の領土拡張を許すことになるVという、当然の批判がパレスチナ人の中から起こっており、パレスチナ側としては安易な妥協は許されない。

長の独裁的なあり方に対する抗議の辞任が相次いでいる。アラファト議長は、一月初旬、こうした風潮に対して△交渉を成功させるためにも辞任を思い止まるようV各地のファタハ幹部などへの電話攻勢をかけた。が、九日にも、カリキリヤのファタハ幹部三人が、「ファタハ内部の悪い状況と地域での運動(ファタハのこと)内部での腐敗の拡大に抗議して辞任する」と発表した。

シャファイ氏は、△入植地問題の解決なしに自治云々は成立しないVと主張し、合意そのものをも批判しているが、彼自身が団長を務めていた時の交渉でもそうだったように、「現在までアラファトは決定を完全に彼の手中に置いている」と独裁的なあり方を批判した。そして、民主性の欠落したあり方では、結局は「独裁的な国家に至るであろうという恐れ、危険が(人民の間に)存在する」、民族運動の指導者にとって「人民の感情、熱望を無視するのは容易なことではない」、「こうした(相次ぐ)辞任やその他の抗議はこれらの危険を示すものである」、「二日にアラファト議長と執行委員会との会議を持ち、民主的で集団的な指導部の必要性を強調したが、執行委はこうした現実に対してなんら有効な対応をえていない」と語った。

また、同会議に出席した民主改革派代表の一人N・アミル氏は、アラファト議長が初めてこうした改革要求の代表との会談に応じたことを一定評価しつつも、「彼は聞くこと、討議することへの用意があることを示したが、なんら

入植地の警備でも、パレスチナ側は入植地の内部に軍を撤退し、そこで警備することを主張し、イスラエル側は入植地の周辺への軍の再開、周辺を含めた警備と自治区内への追跡、逮捕の権利を主張。パレスチナ側は、これでは入植地問題の解決どころか、占領の継続を認めることでしかない、と反発している。

要は、合意が発表された時点から各方面から危険が表明されていたことが、そのまま持ち越されているにすぎない、という状況である。「一〇日間でPLOとイスラエルの交渉が決着すると考えている者は何もわかってはいない。多分、一〇日間で原則的なことは完了するであろう。が、その後(細部に渡る)合意が必要となる」とラビンが一三日に語ったことも頷けるというものである。

実際、オスロ、パリ、カイロと交渉を重ねてきても、ほとんどその溝を埋めることができない、結局タバでの実務交渉へと差し戻されることになった。

タバ交渉の再開(二月一〇日)に際して、シャールパレスチナ側代表は、「私は三週間でその最終的な解決に至ると予測している」と語ったが、イスラエル側は合意を現実のものにする(直訳すれば、地面におろす)熱意を持ってはいないこと、パレスチナ側に妥協を強要しているだけということは、「カイロの理解」を巡る矛盾からの交渉の一時停止(一月二日、ペレスが発表)や三日にエジプトのムサ外相がイスラエルは自治さえも実行する気がないのではと

約束もしなかった」と不満を表明した。こうした不満が前述したカリキリヤでの辞任につながっている。

一二月一三日の撤退開始日が遵守されなかったことだけでも、合意の支持派にとっては相当の打撃であった。実際、人民の間では、△はじめから紙に書かれた合意でしかなかったVという批判の声が上がった。加えて、△ほんの少し撤退開始が遅れるだけで、撤退完了は予定どおりVであるかのように語られた交渉はさっぱりメドがつかず、イスラエル側の要求に妥協するだけのあり方と、その行く末が独裁的な体制とあっては、いっそう人民の支持がなくなっていることは言うまでもないであろう。

三 被追放者の帰還と一〇組織

一二月一五日、残りの被追放者たちが帰還した。とは言っても、一八人は獄中へ戻ることを拒否して、帰還そのものを拒否。一九七人も獄中へ入れられた。一九日に二〇〇人が釈放になったが、ラントイス氏などには「行政拘留」という措置がとられた。

一五日に、マルジ・アズホルのテント村で、近くの村民や、PFLPやDFLPの代表などパレスチナ・レバノンの多くの人々が参加して、彼らの激励会が行われた。彼らは、パレスチナのイスラム運動が、「一夜にして、地方的な運動から国際的な組織に変化、脱皮した」し、一年間の経験は、レジスタンスの戦士にとって、他の組織との「付き合い方」、「敵に対して

いう疑いを抱かせるVと語り、エジプト政府が調停者としての役割を縮小する方向を示唆したことにも示されている。

さらに、イスラエルの農業相が一月五日に、△結局はパレスチナ国家の創出を認めることになるVと合意の実行に反対を表明したこと、一〇日には、ペレスが△撤退にはもはや目指すべき日付はない。それは合意成立から四ヶ月後であるVと語り、ベイリン副外相は△六ヶ月はかかるだろうVと語ったことにも示されるように、合意が、あるいはパレスチナの自治が、実際に地に足をつけるのは遠い先のことになっている。

二 PLO内部の民主化の動き

世界銀行との交渉にあたってはパレスチナ人代表、S・アブダラー氏が、一月七日、△パレスチナの自治への支援を約束した諸国や機関からの援助がとどこおっているVと不満を述べたが、その原因は、撤退交渉が進展していないことに加えて、パレスチナ側が(というよりは、アラファト議長が)「政治的な指名」をしており、それが欧州などの批判を呼んでいることであり、「政治的な指名」に対してPLO内部からも強い批判、民主改革要求が生じていることである。

民主改革要求の最先頭に立っているのは、二国間交渉の団長を務めたシャファイ氏である。かつての交渉団のほとんどをはじめ、PLOの民主化を要求する人士は二〇名を越えた。被占領地内の責任者の指名問題でも、アラファト議

ではなく、他の組織に対しては、過激さを抑え、より現実的に対応することの必要性を学習したし、国際報道機関との付き合い方も学習した、さらには料理や洗濯という「女の仕事としてきたもの」も学習した、これらは帰還した後、必ずや役に立つと確信する、と口々に語った。

獄中にあるハマスの指導者ヤシン師が、△自治選挙には条件があれば参加もありうるVと発言し、被追放△帰還者の一人ザハル氏も二二月二日に同様の発言をした。(一〇組織へのハマス代表は、自治選挙への参加を否定しているが)こうしたハマス側の動向は、アラファト議長はもちろん、ラビン政権にとって、大きな脅威、揺さぶりとなっている。

二三日のハマスの声明は、△ラビンが三日以内に西岸、ガザの入植者の武装を解除すると発表するならば、入植者への攻撃も停止してもいいV、などと柔軟に(?)揺さぶりをかけた。さらに、ザハル氏は、二六日、△ラビン政権が西岸、ガザから全面的に軍を撤退し、パレスチナの獄中者を釈放するならば、イスラエルに対する攻撃を停止する用意があるVと、揺さぶりの追い打ちをかけた。

こうした被占領地内のハマスのあり方に加えて、一〇組織内で指導部の形成を巡ってハマスが半数のポストを要求したことなどもあって、DFLPが反発し、双方が非難合戦となった。一時は、一〇組織が分解しかねないとさえ言われた。

一月六日、一〇組織は、同「連合の活動を導

く統一政治綱領」を採択した。
 まず、自治合意は「民族的な裏切り行為であって、あらゆる手段をもってこれを廃絶しなければならぬ」、そのためにも「イスラエルに対する武装闘争、とりわけ、被占領地での、それを拡大すること」を確認したうえで、PLOは「民族的な達成物であり、これを保存しなければならぬ」、その諸機関を民主的な基礎の上に再建しなければならない」ことを確認した。
 さらに、中央指導部の形成にあたっては、各組織から二名ずつ計二〇名と独立人士を加えたものとすることを決定した。
 レバノン紙などでは、PLOの再建と民主的な運営を主張したPF、DFなどの勝利と伝えられたものもあるが、アラファト議長は独裁的なあり方への批判が高まっているなかで、それを反面教師にし、かつ、被追放者たちが述べたように、共闘する組織とは柔軟にという教訓を活かしたハマスのあり方がそこに示された、と見るのが適切であろう。

四 イスラエル内の矛盾の拡大

八入植者は和平に反対しているが、彼らはイスラエルの人口の三％でしかない、圧倒的多数は和平を支持している。元外相アバ・エバンは合意の直後に語った。が、一月のエルサレム選挙の敗北にも示されるように、右派が勢力を拡大し、今やラビン政権自身が和平に躊躇を示している。
 前述したヤシン師の発言などに対して、ラビ

ン政権はPLOとの和平合意であることを強調し、ハマスの多数派を占めれば、合意はなかったと同様になることを強調して、反対派の非難をかわしてきた。が、パレスチナの圧倒的多数が「投降の合意に反対」という方向にある以上、そうした論理も破綻をきたし、それを取り繕うためにもアラファト議長に妥協の圧力をいっそう強くかけようということになっている。
 また、入植者の暴力行為に対して、ラビン政権はパレスチナのそれと同様に扱うと宣言していたが、これも右派からの圧力の前に、八入植者に対しては発砲やガスの使用をせず、逮捕のみとする。と変更した(一月七日)。
 だが、そうした対応は、極右をしていっそうつけ上らせることになった。
 右派の市当局に支えられて、入植者がエルサレム地区でアラブの女子学校予定地を占拠し、他方でパレスチナ人の家屋を破壊するということが一月四日になされた。さらに、西岸の入植地をエルサレムに組み込むと発表した。これには米政府も抗議せざるをえなかったが、ジュネーブでのアサド大統領とクリントン大統領の会談を牽制するかのようになり、四日、ゴランの新人植地の開所式が行われ、住宅相ベン・エリエゼルがテープ・カットを行い、「われわれがいくらかを放棄するかという問題に回答すべき日は来るであろう。が、それがわれわれの安全をどれだけ保証するかという答えに至っていない以上、私はゴラン高原のいかなる場所をも放棄するという考えにはなれない」と入植活動の拡大を正

当化した。そして、先述した農業相の発言というように、ラビン政権自身が、入植者の暴力行為に屈する方向に至っている。
 八二年のレバノンへの侵略に対する反対運動が高揚した際に、ピース・ナウの創設者が極右の手投げ弾攻撃で死亡するという事件が八三年に起こったが、五日、ニューヨークで、ピース・ナウ・アメリカと新イスラエル基金という和平推進派の二つの事務所が爆弾が設置される(発見、解除)という事件が起きた。そして、そこには「ラビン政権はあまりにも民主的すぎる」という文書も残されていたという。極右のカハ運動はこうした爆弾攻撃を称賛した。こうしたこともあって、イスラエル内では、ユダヤ人内部の殺し合いの回避云々という論理で、ラビンに妥協をするなどという世論が作られた。
 他方、PANAM記念日を前後して、再びシリア主犯説が浮上したり、レバノン南部の緊張を巡って、シリアへの非難が高まった。
 ベイルートでのキリスト教右派のカタエブ本部での爆弾は、モサドあるいはそれと関係する部分の仕業と見られている。また、北部のトリポリ、南部のサイダ両市での連続的な爆弾もモサドと関係する部分の仕業であり、そうした破壊活動のネットワークが摘発された。
 これらは、中東和平の本命ともいえるべき、シリアとの交渉の基礎になる、ジュネーブでのアサド・クリントン会談を前になされている。イスラエルがこうした意図的な緊張の高まりと世論操作を行っていることは言うまでもなからう。

五 各国の動き

パレスチナの自治合意が頓挫状況に陥るなか、部分的、個別的な和平ではなにも解決しない、やはり中東和平の鍵を握っているのはシリアである、といった声が起こっている。
 シリアは、もちろんゴランの全面返還を前提にしつつ、一貫して、「正当で、包括的な解決」を主張している。一二月下旬のクリストファーの訪問に際しても、シリアは、マドリッド形式の遵守こそが解決の基礎であることを強調したが、ジュネーブでのサミットに向けても、そうした原則的な発言を繰り返し、そのためにはイスラエルが根本的に対応を変えることが問われていることを強調している。他方では、(そうしたイスラエルの対応次第では)国交の正常化や大使館の交換といったこともありうる、と変化球を投げたりした。

他方のラビン政権も、前述したように、ゴランの入植地を拡大したり、南部の闘いでシリアを非難する一方で、シリアとの完全な和平がなされれば、八ゴランからの完全撤退もありうる。と示唆した(八日、ラビン)。
 アサド政権は、そのサミットを直前にした八、九の両日、湾岸戦争直後に形成されたダマスカス宣言諸国外相会議を主催した。レバノンの新聞は、八国会議の最も重要な点は、アサド・クリントン・サミットの直前に、ダマスカスで開催されるということであり、シリアは米に対して、湾岸諸国の支持を得ていることを強調できることになった。と論評した。そして、その会

議では、これまでシリアが留保してきた「PLOはイスラエル合意を中東和平への第一歩」という評価を行い、「正当で包括的な和平を達成すること」の重要性とシリアへの「強力な支持」を強調し、ジュネーブ・サミットでそうした「和平へと導くことを希望する」とした。
 米議会から人権問題として批判されてきた在シリアのユダヤ教徒の出国査証を発給し、あるいは米議会のイスラエルの不明兵士調査団を受け入れたたりしたのは、将来の和平後の世界での地歩を作っておくことももちろんあるが、米国をはじめとする西側諸国との関係性の中で、二世紀への活路を固めようということに重点が置かれている。
 ヨルダンのフセイン国王は、一月に入って、二度に渡ってPLO側の対応を激しい調子で批判した。そして、PLO側がどんな対応をとろうと西岸におけるヨルダン銀行支店の再開は行くと発表した。アラファト議長は急遽カドゥミ氏を派遣したが、ヨルダン側はこれまでそうした責任の枠外にいたカドゥミ氏を派遣してきたことを含めて批判された。七日に経済合意の調印には至ったが、両者間の矛盾には根深いものが存在している。

レバノンは、クリストファーの歴訪がなかったことに加えて、米・ロシア・ノルウェーが共同で提案した中東和平から安保理決議四二五を除外するという決議が国連総会で承認されたことに懸念を表明した。とりわけ、モロッコ、エジプト、チュニジア、ヨルダンのアラブの四カ

六 結語にかえて

自治合意に反対する諸組織は和平一般に反対であるかのように伝えられたりしているが、それはほんでもないことである。パレスチナの人民は(もちろん、レバノン、シリアその他の人民も)和平を願っている。が、それが占領者の下での「和平」ではなく、真に平等な人間として尊重し合える関係性のなかでの和平であるかど

うかに鍵がある。
アラファト議長は、一月二日、「われわれはパルチスタンの中に住むようなことはしない。ラビンがパレスチナ人民を抑圧しようと考えたとしたら、それは間違いである」と語った。だが、多くの人々はPLOイスラエル合意をパレスチナ人民をしてまさにパルチスタンに閉じこめるものとみなしている。

米国内のユダヤ人社会では、極右が組織している「ジュダヤ・サマリア（西岸のこと）基金」への反発が伝えられ、それへの回答が前述したニューヨークでの爆弾事件であった。そして、イスラエル内ではユダヤ人同士の殺し合いになる云々と騒ぎ立てているのであるが、言い換えれば、入植者がパレスチナ人を殺害していることは、取るに足らないということになる。ここにも、不平等が如実に示されているし、ユダヤ人とパレスチナ人の関係は白人とパルチスタンの関係と言えるのではなからうか。

これでは、いつまでたっても、地面に足はつかないというものであろう。

資料

抵抗と挑戦のよびかけ（抄）

民族統一指導部よびかけ、第一〇一号

*民族統一指導部は統合し、占領を打倒するまでインティファダを継続する

*敵は被占領地の全域への支配の樹立を企んでいる

△われらが祝福された人民へ▽
ここに英雄的なインティファダが七年目に入るに際して、闘いを再び新たに、いかに犠牲が大きかろうとわれらが人民の目的に向って、闘い続けることを証明している。われらが人民の目的は、南部の英雄的なレジスタンスは、そして離散の民の闘いは、その目的がなんら実体化されていないのだから継続するのは当然であり、インティファダを破壊しようとするいかなる陰謀よりも強力である証拠としてもある。ガザで、西岸の各地で、インティファダの大衆は、入植者どもの乱暴狼藉と闘い、戦士たちは占領軍に打撃を与え、「特務」、諜報機関、車、入植者の協調に混乱を与えている。

△われらが英雄的な民族の大衆へ▽
祝福されたインティファダが七年目に入るに際して、占領を打倒し、独立を達成せんと闘いを継続している諸君らを称える。各地で占領者、その軍と闘い、エルサレムを首都とする独立国家の樹立という、民族的な権利に関して妥協などないことを示している。

諸君たちが、占領者が残っている限り、入植地と入植者、恥ずべき殺人者どもが残っている限り和平などないし、聖なる都市に関する妥協などないし、帰還、自決、独立国家という言葉を実現のものにすべく闘っていることを高く称える。

△われらが英雄的な人民、大衆へ▽
われらが民族の大義、民族の目標、人民の統一

一は、九月一三日以降、危険な過程に陥った。だが、敵シオニストはわれらが被占領下の領土をコントロールする要因をその汚れた手に入れるため、妥協を引き出すため、もってイスラエル米の条件を呑ませるために策動している。敵は、パレスチナ問題を「解決」し、可能な限り多くのわれらが領土を占領し続けんことを策している。敵はまた、「パレスチナ警察」をして占領者の防衛にあたらせ、パレスチナ内部の戦闘を作り出そうと策している。入植者どもの日々のテロ行動は、われらが大衆に恐怖を与え、占領の継続を認めさせ、すでにガザで開始されているように、新たな軍事基地の設立を正当化するためのものである。

△われらが人民、大衆へ▽
歴史は、帝国主義シオニズムの前に、弱々しく、敗北した者にはなんらの余地も与えられはしないことを、したがって、われらが選択すべき道は民族の権利を堅持し、闘いを継続すること以外にはないことを、教えている。人民の経験においてもまた、いかにその弾圧が苛烈であれ、人民の決意は決して挫くことはできないこと、占領とその陰謀は打倒され、失敗することとを教えている。

△われらが人民、大衆へ▽
独立のための闘いが開始されて以降、諸君とともに存在してきた、インティファダの民族統一指導部（以下、UNL）は、ここに、合意の調印以降の最近の状況を克服し、再度統一し

たし、最後まで諸君とともにあることを明確にする。あらゆる民族的な勢力の参加をもって、民族の目標のすべてが現実のものになるまで、民族の闘いの最先端の任務を担うことを約束する。過去のあらゆる否定的な側面を克服し、人民のあらゆる潜在力を統合し、民族と人民の大義を実現するために闘うことを明確にする。したがってUNLは、諸君たちがUNLの下に結集し、人民の利益と大義にのみ自己の関わりを限定し、勝利を保証し、陰謀を打ち壊し、自由帰還、独立というわれらが人民の目的に向けてよりよい状況を創り出すようよびかける。

UNLは、クリスマスと新年に際して、われらが人民に祝賀のあいさつを送る。

UNLは、闘いを継続、拡大させるためにも、以下をよびかける。

1. 一月九日、インティファダ七年目突入。ゼネスト
2. 一月一〇日（金曜）、モスクではインティファダの殉教者のすべてにお祈りを
3. 一月二二日、PFLP創立記念日、攻撃部隊は占領者への攻撃を
4. 同日（日曜）、教会では殉教者へのお祈りを
5. 一月二三日、（ガザ・アリーハ撤退開始予定日）占領継続の正当化を非難し、ゼネスト
6. 一月九日〜十五日、占領者との闘いを拡大し、目的の達成までインティファダを継続することを明確にせよ

PFLP二六周年記念集会報告

PFLP情宣部速報
九三年一月一七日

7. 一月一五日〜二五日、インティファダの七年目の祝賀デモと、殉教者、負傷者、獄中者の家族を訪問するなどの組織化を

8. 一月二三&二四日、商店は全日閉店を

九三年一月八日

（編注・アリーハとは、ジェリコのアラブ名。以下、資料では、アリーハを用います）

PFLPは、本日、ダマスカスのヤルムوک・キャンプで、二六周年記念集会を開催した。その集会には、パレスチナ諸組織の指導者たちやアラブの党派、民族運動の代表が列席した。以下、代表的な発言者の要旨を報告する。

1. ムサウィ師はハズバラを代表して発言した。

彼は、ハルツームでの民族大会でガザ・アリーハ合意を非難しなかったことを批判した。彼は、南部レバノンでのレジスタンスによるイスラエルとその手先に対する戦い、とりわけ、最近のイスラエルとその手先ラハドの部隊への攻撃で、一二人を捕虜にした作戦に触れた。彼は、イスラエルによって作られている「安全地帯」とその発想は、そうした戦いによってまもなく崩壊するであろうことを強調した。

彼はまた、一〇組織の指導者たちが団結を強化すること、そうすることによってガザ・アリー

ハ合意を打倒することができることを強調した。

2. ハワトメDFLPP書記長は、一〇組織を代表して演説した。

彼は、九月一三日の合意に関して、国民投票をよびかけた。パレスチナ人民の意志を尊重することの大切さ、したがってその国民投票の結果を尊重することの重要性を強調した。

彼は、パレスチナ人民がそうした投降の合意に拒否を示すことは確実であり、ビル・ゼイト大学の学生自治会選挙で「エルサレム第一」リストの圧勝、ラマラでの「大学社会」リストが勝利したことは、同合意に対する人民の意見を如実に示すものである、と強調した。

3. ハバシュPFLP書記長は、PFLPを代表して演説した。

彼は、ガザ・アリーハ合意の深刻さは、（七九年のサダトが結んだ）キャンプ・デービッド合意を上回るものである、なぜなら、キャンプ・デービッドではイスラエルはエジプトの主権を承認したが、ガザ・アリーハ合意ではイスラエルに存在権を認め、他方、パレスチナ側にはそれを代表するものへの限定を許すということになったからである、つまり、この投降の合意では、イスラエルは単にPLOとその貧弱かつ限定的な「自治」を承認するというものでしかない、ということを強調した。

困難な国際情勢やアラブの現状をもって、アラファトがオスロでの合意に調印しなければならなかったかのよう言う者がいるが、現実には、PLO内部の階級的な変化にこそ所以があり、

PLO内部の官僚機構と買弁ブルジョアが、そうした合意に共通の利益を見いだしたというのが真実である。

また、一部の人は、ガザ・アリエーハ合意はエルサレムを首都とするパレスチナ国家への肯定的なものを有しているなどと言うが、PLOが武装を解除し、アラブの協調を犠牲にし、インティファダと民族的統一を犠牲にした後、どうして国家を創出し、エルサレムを解放することなどができようか。アルジェリアでの民族的な勢力の経験が、イエメンでの統一と民主の経験が、われらが革命にとっての教訓、希望、アラブの統一の例になると、PFLPは考えている。

信念と石とで闘っているパレスチナの人民への敬意を表するとともに、決してこのような投降を受け入れることのないよう、よびかける。また、PFLPとパレスチナ人民は、帰還、自決、建国の憲章を遂行するまで闘いを継続することを表明する、と彼は強調した。

インティファダ七年目の記念声明 (二)

イラ・ル・アマーム誌、第二二六号

△その一▽

パレスチナ解放人民戦線総司令部派の声明
われらが人民は今年、パレスチナの地での大衆的インティファダの七年目の記念日を、非常に複雑な政治的環境の下で迎えることになっ

り飛ばすようなことを断じて許しはしないし、いかにその対決が困難なものであれ、屈伏したギャングどもによる、敵とともに暗やみの中を進むような汚らわしい陰謀を許すようなことは決してしない。

パレスチナ経済はイスラエルとの分離を

アッサフイル紙、九三年二月一日

パレスチナの経済評議会代表を務めてきたが、その多くのメンバーが専門家ではないことを非難して一月に辞任した、サエギ博士は、将来のパレスチナ「国家」の経済はイスラエルのそれから分離せねばならないと語った。彼はまた、アラブ諸国は対イスラエル・ポイコットを最終すべきではない、とも語った。

多くの者はアラブ・ポイコットの終結に熱心だが、彼らはまだ、イスラエルに対するポイコットはパレスチナ人の問題の解決に至らなければ撤去されないとも言う。PLOはイスラエル合意では、われわれパレスチナ側とイスラエルとはシャム双生児のような経済関係にある。合意では、あまりにも強力でイスラエル経済に連結されており、われわれはアラブに背を向けることになっている。

われわれがその経済をイスラエルから分離するのは容易なことではない。そのためには、言うなれば、外科的な手術が必要で、われわれはそうした手術を行わなければならないであろう。

た。パレスチナの大義を完全に抹消し、終焉させんとする米・シオニストの陰謀と企みが、いわゆるガザ・アリエーハ合意という形に結果していることに所以している。

われわれ、パレスチナ解放人民戦線総司令部派は、われらが人民の闘い、とりわけ、インティファダの七年目への突入と、他方では、正常化と強制移住、根絶策動がわれらが人民内部へ、アラブ、イスラム諸国へも拡大する米・シオニストの影響力の陰となつて、以下をよびかける。

1. 敵シオニストとのいかなる形の和解、正常化策動にも抗し、ガザ・アリエーハ合意を拒否すること。そのためにも、民族的な潜在力のすべてを、すなわち、パレスチナ・アラブ・イスラムの力のすべてを統一せん。
2. パレスチナの地における大衆的な蜂起したインティファダへのあらゆる形の支援を行い、その目的に向かい、闘いを継続しえるようにせん。
3. 被占領地内外での敵シオニストに対する武装闘争を拡大し、抹殺陰謀のあらゆるものに対抗道こそ選択せん。

△その二▽

パレスチナ革命的共産党の声明
われらが民族の蜂起インティファダは、今や七年目に入る。インティファダは、占領者どもが力とテロ、血まみれの大量虐殺、骨を中核を叩く政策や家屋破壊、ロケット攻撃など

そうした連結は占領の下で存在しているのだが、言うまでもなく、それは強制されたものである。合意の下では、パレスチナがそうした連結に合意してしまっている。これはとんでもないことである。イスラエルは、同合意を通してアラブ諸国に到達することを求めており、パレスチナ交渉団がこうしたことに意識的であったならば、もっとそれを防ぐことができた。

経済評議会の構想が持ち上がったとき、私はそれが独立した機関となることを望んだ。私は、同評議会がパレスチナへの二億四千万ドルの援助を取り扱うことになるので、それらを監督する高級委を提案した。

同評議会の形成は援助国家に連絡された。アラファトPLO議長が承認文書にサインしたとき、彼はあらゆることはPLOに直結されねばならないと語った。そして、アラファトは自らを同評議会の観察機関の議長に指名したが、これは適切ではない、と考えた。

私は、アラファトに「国家」の最高責任者たる者が同時に同機関の最高責任者であることは不可能である、と伝えた。欧州各国はそうした形での設立を批判した。後でアラファトはそれを軟らげて、外相にあたる地位のカドゥミ氏が同機関の最高責任者として指名された。

イスラエルがその国際的な関係性と技術とから、経済市場を支配することが可能であろう。したがって、われわれの強調点はパレスチナ経済をイスラエル経済から分離することである。パレスチナ人は、地理的人口学的な理由などか

をもつてしても、叩き潰すことにも終結させることにも失敗したことを証明してきた。

敵は、アラファトと彼の一部の取り巻きが調印した、墮落の合意によって、われらが人民の意志を砕き、敗北へと導くと考えた。しかしながら、その墮落の合意の後で、その適用にむけての掛け声と太鼓の音にもかかわらず、インティファダはいっそうの激しさをもって、再び、三度び、爆発した。

そして、占領者と陰謀への協調者、そしてそれらの裏に存在する米国のカケにもかかわらず、英雄的なインティファダは発展を続け、その闘う力は拡大している。われらが人民は、強固な意志、力、殉教の精神、自己犠牲をもって、ラビンとアラファトによって世界の首都に拡げられたニセの和平を包囲した。

そうした大衆的な闘いとしてのインティファダの再生とそうした魅惑的かつ独創的な闘いとその行為は、闘いの挫折をよびかけた者に対する強固にして強力な回答を形成している。そしてまたそれは、われらが人民は疲れ果てた、彼らはどんな代償を払ってでも敵との停戦を望んでいる、などといったニセの宣言を暴露し、粉碎している。われわれは、われらが人民は柔軟で健康的な六感と強固な革命精神という力を持っており、その大義を裏切り者や敗北主義者の手からもぎ取り、自らの手にしっかりと握っている、と確信を持って言うことができる。

われらが人民、大衆は、その犠牲者を踏みつけにするようなこと、殉教者や犠牲者の血を売

ら、ヨルダンとの密接な関係を望んでおり、かつレバノン、シリア、エジプトといった他の隣接国家やアラブ全体とのそれを望んでいる。なによりも、アラブの一員としてあることの大切さを強調する。

もし、われわれが、たとえば電気などのように、われわれ独自の能力を有するまで、他の国家に依存しなければならぬとしても、われわれは、イスラエルではなく、エジプトやヨルダンに依存すべきである。通貨の問題では、いまだ、パレスチナ通貨を発行する段階には至っていない、と私は主張してきた。通貨の問題は非常に微妙な問題であるし、もしわれわれが現在の人民の信頼を得なければ、経済は破産するだけであろう。そうした例としてイラクの経済がある。私は、その頭取会議へのパレスチナ人の参加をも含めて、ヨルダン中央銀行との協力を提案した。

(将来、パ国家とレバノンとの競争が起こるとしたらどういう分野でと考えているか、という質問に対して、サエギは)、パレスチナとレバノンの競争という要因はなく、財政、技術分野などでのイスラエルとレバノンとのその方が大きな可能性を有している。もし、長期に渡る内戦がなければ、レバノンは軽中工業分野でイスラエルの最大のライバルとなっていたであろう。パレスチナ経済の現状は、レバノンの産業、農業、財政などからは大きく立ち後れているというのが実情である。

自治の違いと撤退の遅れ (抄)

アル・ハヤト紙、九三年一月一九日

アラファトPLO議長とラビンイスラエル首相との、パレスチナイスラエル合意に関する解釈の違い、とりわけ自治の中身の違いが、一月二三日に開始されることになってきたが、アラーハからの撤退を延期させている。

エルサレムのPLO高官によれば、どちらの側もその達成する最大限に関して明確にはしていない、という。その高官は、「われわれの見解では、暫定期間にすでに最終的な解決の要因も含まれてくる。だからこそ、われわれは主権に関する一語を入れようとしている。そうすれば、それはわれわれをして、パレスチナ国家へと導くことになるからである。他方、イスラエル側は、そうした主権に関わるあらゆる側面に反対し、暫定期間はそうしたものを反映しない、と主張する」という。アラファトは現時点から独立した主権国家を要請し、他方ラビンは彼にガザ、アラーハの限定した自治しか与えないと主張している。早期の権力の移行についても、それは被占領地の全面的な自治というものには至っていない。

他方、イスラエル高官によれば、最近のカイロでのアラファトラビン会談で、双方がお互いにそうした願望を実現するという希望をウヤマヤにしたままである、という事実が明るみに

出てきたという。

カイロ交渉に関わっている当局者筋は、「アラファトは、パレスチナ国家の設立がイスラエルの世論に及ぼすであろう微妙な問題を避けるということも考慮せずに、イスラエルが彼に国家に必要なあらゆる要因を与えてくれるだろうと考えている」と指摘する。他方、観測筋は、「安全保障問題が主要な論議課題であるが、それはイスラエル側にとって、あらゆる係争問題をとりあげることと正当化することになっている。イスラエル側は、カイロ交渉で、アラーハヨルダン、ガザエジプトの国境検問問題が持ち上がったときに、イスラエル側はそうしたことを明確にしてきた」と指摘する。

パレスチナ側は、彼らPLO執行委メンバーが将来アラファトと相談するために、イスラエルの旗の下でヨルダン川を渡り、イスラエルの検問と許可の下でアラーハに入るということを想像することは堪え難いと言う。

対外安全保障とはなにかという点でも違った解釈が存在している。パレスチナ側の解釈の一つは、いかなる脅威も海からのみ来るというもので、エジプトパレスチナ、ヨルダンパレスチナの共同と外国(多国籍)軍の共同パトロールをよびかけている。だが、イスラエルは、対外安全保障ということになると、製品、麻薬、武器、さらには難民までを含めると、そして被占領地からイスラエルへの侵入も含めたすべてということになる。パレスチナ側はまた、イスラエルがテルアビブの空港で認めているものの

すべては被占領地にも、そしてガザ、アラーハにもはいることを許されるべきである、と主張する。

アラーハの地域に関するそれは、別の大きな論争点である。パレスチナ側はそれはアラーハ地域、したがって約三五〇平方キロと主張し、その重要な点を西岸にはヨルダン法が適用されるからであり、もしここで一つの地域を分割することを認めるなら、将来、他の地域においても同法の適用に問題を起こすことになる、としている。

他方のイスラエル側は、アラーハの地域はユダヤ人の入植地に影響を与えるものであってはならない、彼らのステータスを変えることにはならない、と主張する。クネセツで、ラビンは、パレスチナ側がPLOイスラエル合意の条項を歪めている、と非難した。パレスチナ側は、アラーハの中の入植地の特別な地位を認めるが、アラーハそのものを特殊な地域にしてしまうことには、決して合意できないと主張している。

入植地の保護についても解釈の違いがある。パレスチナ側は、イスラエル兵士は入植地の内部に存在すべきと考え、他方イスラエル側は、イスラエル軍は自治地域の入植地周辺を自由に防衛パトロールする権利を有している、と主張する。

すでに複数のイスラエル高官は、もしアラファトが暫定期間の交渉に、最終段階で解決するとしたことを含めると主張するならば、延期され

た会議は開かれることはないと言えとおわせている。

パレスチナ難民がスカンジナビアに (抄)

アッディヤール紙、九三年一月二二日

在レバノンのパレスチナ難民数は、約四〇万と見積もられているが、レバノンのキャンプの悲惨な生活条件を抜け出すために密かにスカンジナビア諸国への流出が起っており、そうした背後にはPLOの支援がある、という。

レバノン内戦の終結は難民の役割を縮小した、とレバノン最大の難民キャンプで約八万人が居住すると言われる、アイネヘルワの書記S・ジュマーは語った。「われわれは、この二五年間に渡って軍事的、社会的な機関によってささえられ、保証されてきた生活に対して、今やPLOがその武器を放棄した代価とそのサービスを劇的に縮小したことの代価を支払っている」

アラファトPLO議長に反対するパレスチナ組織の一人は、同機構が直面していると宣言している財政危機は「アラファトによって作られた危機であり、(PLO)イスラエル合意の後(の)それは被占領地の利益と基金を独占するためのものである」と語る。

パレスチナの大義のために死亡した者、すなわち殉教者の家族は約七〇〇だが、彼らには毎月三〇〇五〇ドルが支払われていた。が、それが数カ月前から停止した。「われわれが飢餓で

苦悩しているというのにアラファトは何をしてきていると言えるかね? 彼はさまざまアラブ諸国に散っているパレスチナ難民の面倒をみたり、支援することに何らの利益も見いださはないのさ。屈辱と投降の合意は、われわれの運命を討議することすら無視してしまった」と彼ははきすてるように語った。

パレスチナ人民の間では、UNRWA(パ難民に対する国連の支援機関)予算の縮小は医療、教育、社会といったサービスマ面に大幅な打撃を与えているという。UNRWAの学校は現在も約二五〇〇人の児童に教育の機会を提供しているが、窓は壊れ、時には教科書が数名に一冊という悪条件にある。

他方、レバノン政府は、難民の相当数をその領土から追い出すことを策している。そして、彼らがいくつかの職種につくことを防止し、彼らに低賃金の汚い仕事を行うことのみを許している。

あるUNRWA高官は、パレスチナ人の失業者の比率は六〇%にも達するであろう、と語った。二〇歳以上の世代は、これまで武装行動に関わってきたが、現在は、何らの職業も持たない状況にある、というのが実情である。

「貧困と絶望からの脱出を求めてアイネヘルワの約二〇〇〇の若者が、九三年にニセのドキュメントでノルウェイ、スウェーデン、デンマーク、ドイツへと移住し、そこに住み着いた」と当局者は語った。

別のキャンプ、ラシャディーエの農業労働者

は、「私は一日の労働で平均五ドル受け取るんだが、これでは家族を養っていくには十分ではない」と語った。また、同キャンプの看護士は、パレスチナ赤三日月社への援助は半分以下に落ちているし、ノルウェイからの援助がなければほぼ活動停止になってしまうだろう、と語った。「すでに病院の医者の四人が移住してしまっただけの月の給料も一五〇ドルを越えることはなかったから、当然とも言えるんだけどね」と彼は付け足した。

帰還する英雄たちのことば

アッディヤール紙、九三年一月一六日

(編注、アッディヤール紙が、帰還を直前にした被追放者たちのマルジ・アズズホルのテント村での発言や、ズムラヤ検問でイスラエル兵によって持ち物の丹念な検査と尋問を受け、手錠と目隠しをされて、イスラエル内の収容所へと連行されていたことの長い報告をしたが、これはその一部、ズムラヤ検問での最後の一言の部分である。)

*ドウェイク医師(ランティスイ氏を支えてきた報道官)、「私には、今、われらが忍耐と確固たる主張、われわれこそが正しいという信念が達成した誇りと勝利の誉れ、レバノン人民と政府の尊い立場へのわれらが愛情、そしてわれわれが今向っているパレスチナの人民がみすばらしいキャンプでの生活を押しつけられていることへの悲しみと怒りといった感情がないませ

になつてゐる。だが、次のことを強調させてほしい。すなわち、被追放者はパレスチナ人のキャンプの一例を示した、それは、イスラエルによって強制的に作られた、が、彼らの意志に反して、それは解体されたし、われらが兄弟たちはその郷里、家族のところへと帰って行くし、言うまでもなくわれわれは大きな誇りを持つてゐる、と」

* シャミ師(イスラミック・ジハードの代表)、「マルジ・アッズホールでのわれわれの経験はわれらがパレスチナ民族とアラブ・イスラムの民族にとって大きな肯定的な効果を有している。多くの兄弟たちはわれらと問題を共有し、われらが苦悩を共有してきたし、している。追放という苦渋と苦痛にもかかわらず、われわれは追放の日々とともに過ごしたレバノン人人民とあらゆる兄弟たちの偉大なる感情を心の中に持つて、今、帰還の途にある。それらの記憶は、雪の、氷の、寒さの日々の記憶と同様、非常に生き生きとしてゐるし、決して忘れることのできないものである。われわれは、われらが決意が勝利したから帰還するということを強調したい。われわれは、再び、われわれを追いかけ、獄中に放りこんだ同じ敵と直面するし、奴らは同様の犯罪を繰り返すであろうが、われわれはそこでも勝利することになろう」

* ザハル医師、「帰還は二つのことを意味する。マルジ・アッズホールからの帰還は、九二年一月一四日から開始された大量逮捕、空腹、喉の渇き、垂れ流しといった精神的な屈辱をともなつた非人道的な状況下での長時間に渡る追

放過程と、家族、エルサレムはないというわれらが民族を完全に解体せんとする国際的な陰謀に打ち勝つての帰還ということの意味する。他方、どこへの帰還かということでは、神が祝福している土地、エルサレム、ガザ、家族のところへの帰還であり、世界の悪魔どものすべてがわれわれをそこから根絶しようとしているところへの勝利の帰還である。われわれの次のモットーは、(真実を語る)ということになろう」

* アブ・サレム医師(彼は医者としての免許を追放期間中に取得した)、「この間われわれは、丸一年間の喜びと悲しみをフィルムをみるように過ごしてきました。嬉しいことは学習できたということであり、われわれを分散させようとする敵への挑戦、その継続、安定ということです。この期間は、われわれにとって肯定的な建設のための完全な投資になつたと言えます」

* ヤシン医師、「帰れるということはやはり嬉しいことです。家族、愛する人々と会えるということは嬉しいことであり、地域の人々にわれわれの得た経験を運んであげているのだと考えれば、これも嬉しいことですよ」

* ハムラ(ベツレヘム出身)、「苦痛と喜びの記憶で満ちています。勝利の帰還を喜ぶとともに、追放の最初から一緒だった兄弟たちや友人たちと別れるという苦痛があります。それからわれわれが在外でキャンプが作られ、(自主的に)解体される最初のキャンプの住民であつたことを誇りに思っています」

* ハリフ(やはりベツレヘム出身)、「祝福さ

れた土地へと帰還できることに喜びでいっぱいです。われわれはレバノンのことを心にしっかりと抱いていきますからね」

* H・ユージェフ(帰還のためのエルサレム・キャンプの村長)、「マルジ・アッズホールでのわれわれの経験は苦渋に満ちたものではあつたけど、忍耐と安定のテストでもありました。キャンプ内の有力な人々が結集し、まさに言葉どおりの(憲法)を作り、さまざまな分野の専門的なものを活かして、人々が小さな国家のように自治を行つたこと、そして、この経験を郷里で実際に展開し得るといふことに誇りを持つています。イスラエルはわれわれを危機に陥れようとしたけど、われわれはそれを祝福されたものと変えたのです」

アブ・ザイド師(アル・アクサの僧侶)、「帰還した後、郷里でのわれわれの役割は、モスクで、自らの周辺で、人民に内部対立を避けることの大切さを伝えることです。なぜなら、イスラエルは意図的にそれを作り出そうとし、分裂の種を撒き散らしているからです。われわれ、パレスチナ人民は、お互いを理解し統一するでしょうし、アラファトをして彼の道を歩ませるべきではないでしょう」

シリアのラビ... 在シリア・ユダヤの自由は保証されている

アッサフ・フィール紙、九三年一月二四日

在シリアのラビ、イブラヒム・ハムラ師は、

シリアではユダヤ教徒の宗教、文化、経済上の自由が尊重されている、と語つた。

アサド大統領が在シリア・ユダヤに出国ビザを認めると決定した後、米へ出たユダヤのうちの多くはダマスカスに戻つてきている。シリアから出国した約二〇〇〇のユダヤ教徒の多くは、ニューヨークのユダヤ人街、ブルックリン地区に定住した。現在、シリアには一六〇〇人のユダヤ教徒が残つており、そのほとんどがダマスカスとアレppoにゐる。

シリアを出国した者はいつでも帰ることを許されている。ダマスカスの同コミュニティの人々は、出国した人々の多くは彼らの財産を売却してはゐない、なぜなら、彼らはシリアの外に米国内での生活を試してみるが、多分戻ることになると考えているからである、と言う。米国内では、シリアからのユダヤ人は、彼らのコミュニティ内部での結婚を、そして中東の伝統を維持することを好んでいる、という。

ハムラは、多くは米国内ではより良い経済的な環境があり、彼らは多くの金を儲けることが可能と考えて出ていった、なかには、家族全員を連れていこうとした者もある、だが、米国内に行った者の多くは「言語、高い税金、職業の機会などで、彼らの専門分野を活かすことは困難であると聞いている」と語つた。こうしたおかしな雰囲気の原因は、国際的な報道が「問題を創り出し」たことから起つてゐる、と彼は付け加えた。

ハムラの妻と六人の子供たちも米国内へ行つ

たユダヤの一部である。シリアのユダヤ教徒は今、彼らが米国内に定住すべきか、シリアに残るべきかの暫定的な段階にあると言へる。多くは「和平易程での新たなうねりを持っており、そうなれば出国した者も帰ることになろう」と彼は語つた。

(編注、別のインタビューで、同師は、「最初に旅行が緩和された際に、米国内に移住した者のうち約四〇の家族が一年以上経って帰郷した。なぜなら、彼らは米国内が好まれない、帰郷したからである。ここでの生活はすばらしいのです。われわれは、われらが宗教、文化、経済活動を自由に展開している。彼らの帰郷はそれを実証することにもなつてゐる」と語つてゐる。)

ダマスカスのアミン地区は、同市に在住のユダヤ教徒のほとんどが住んでいる地区である。そこには四八年の後、パレスチナ人が定住し、シリア派社会も存在する。約四〇〇〇人いたユダヤの数は、近年半数以上が出国したため、人口が大きく減少した。その結果、同地域の二つの学校がイブン・マイムン校に吸収されることになつた。その学校では、現在、二〇〇名以上のユダヤの学生と他の宗派の九人が学んでいる。そこでは多数のパレスチナ人教師が英語を教えている、という「皮肉」な現実が存在する。

シリアでは、ダマスカス、アレppo、アル・カメイシリの三カ所のユダヤ教徒社会に三人のラビが存在している。彼らはほとんどのユダヤ教の祭典、伝統などを行つてゐるが、さらにもう一人、ワシントンで割礼技術の訓練を受けて

いるラビの到着が予定されている、という。ダマスカス市内だけでも二二のシナゴグが存在し、ユダヤ教徒はそこで祈りを捧げ、祝日などを祝う。

ユダヤ教徒の法律家S・カトリは、シリア内のユダヤ教徒社会は「最良の状況にある」と語つた。ユダヤには、四八年以降いくつかの制約があつたが、アサド大統領が彼らの旅行を認めたことから、他のシリア人が有している権利のすべてを有することになつた。彼自身も、家族とともに米国内に移つたが、戻つたのだという。「なぜなら、私は私の国や友人と離れ、再び一から仕事をやり直すことはしたくないからね。それに、私はここが快適と感じてゐる。最近、(保険会社と)裁判のことで契約があつたところですが、これは私には本当に重要なこと」と語つた(下注)。

ユダヤ教徒のビジネスマン、Y・ジャラティは、アサドを「地域の平和の英雄」とよび、いつかはエルサレムで祈りを捧げたいと語つた。彼はまた、(ユダヤ教の)トラハが告げている平和の日々は必ず来るし、すべての戦争のための武器は破壊され農業用の器材になる、そして世界のだれもが戦うことを好まず、最終的にわれわれが待ち望んでいるメシアが現れる、と語つた。

(注、彼らは、ユダヤ教徒であつて、イスラム教徒やキリスト教徒がそうであるように、シリア人であると強調する。)

「中東市場」はアラブの分断 (抄)

アッサフィール紙、九三年二月二三日

故ナセル大統領の信奉者として知られる、アル・アハラム紙の元編集長ヘイカル氏は、カイロでの講演で、イスラエルが「中東市場」を提案することによって「アラブの分断」を策している、と警告した。また、彼は、現在は、これまでの「サウジの時代」に代って、「イスラエルの時代」と言える、とも語った。

現在と将来の時代と取り組んでいる知識人や理論家の一部には、アラブ民族に対して、イスラエル外相ペレスが提案し、実際に準備されているところの、「中東市場」を恐れるものはないとも語ろうとしている。われわれは時には思考や論理の中で失敗をおかすものだが、われわれが直面しているのは単なる中東での市場という問題ではない。それは、イスラエルが支配的な地位を持つようとしているという事実を見落としており、論理的でもないし、正しくもない。

地域の全体でわれわれが直面している現実のもの、つまりイスラエルが目指しているものは、単に「中東市場」というものでなく、アラブ民族を次の三つのように分割するということなのである。

つまり、1||西、北アフリカの西側の諸国は、地中海を跨いで欧州と結合する。それは現在進

行している。2||東、歴史的なレバント地方は、イスラエルが存在し、そこを支配することを目的としている。3||湾岸、産油地域全体は、こっそりとあれ、あるいは順次とあれ、強国の容易な餌食ということである。

エジプトはこうした地図ではアラブ民族から孤立する形になる。いずれにせよ、「中東市場」というのは地域を空白にしようという計画の一部でしかない。問題は、イスラエルが経済的、軍事的知識的な支配をする力を有しているということからではなく、地域を、アラブを分断、弱体化し、もって覇権を可能にするということにある。

エジプトは今、選択肢としていくつかの可能性を有している。そのためにも、第二次大戦以降の時代を簡単に見てみよう。

戦争中は唯一の選択肢は、文化的には仏とのそれもあったが、政治面では英国との関係であった。同盟側を支持するのか、さもなければナチの翼に陥るかであった。戦後は、民族・パンアラブの時代であった。最優先事項は帝国主義に抵抗し、民族の、国家の独立、アラブの統一、帝国主義とジオニズムに対して闘うこと、言い換えれば、非同盟と再建であった。

六七年戦争での敗北は、民族的な時代の後退の開始であり、七三年にそれが消失した。代ってサウジの時代が出現した。他のアラブの産油国を伴ったサウジは、イスラエルとの闘いにおいてアラブを支援した。それは七三年には石油の値上げともあいまって最も大きな影響力があっ

た。

八二年、ペイルストがイスラエルに占領された時、石油とその金はアラブの権利よりも弱いことを明確にした。そして、イラクのクウェート侵略が起こり、石油とその金はアラブの独自の責任性よりも弱いことを証明してしまった。

「サウジの時代」は、五〇年代に達成した信用をばき取ることになった。その時代の政策の全体のバランスシートは、確立された原則の完全な損失、完全な混乱であり、資源の全面的な無駄遣いとなった。こうした混乱の一例が、イスラムの聖戦の旗が、エルサレムを防衛するためではなく、アフガンやアフリカの角に掲げられたことに示される。

この「サウジの時代」に続くのが「イスラエルの時代」である。地域の民族的な勢力は疲れ果て、石油の力は協調することができず、言うならば八平原は既成事実を作った者なら誰にでも開かれていようという状況にある。

言うまでもなく、私はイスラエルが奇跡を行う能力があるとか、その力を誇大視するとか、その重力以上の重さを与えるとか、言っているのではない。この瞬間において、イスラエルが地域の優先事項を設定するひとつになっているということである。

だが、私はそれは一時的で非常に短いものであると、確信を持って言う。

重要日誌

一九九三年二月一日〜九四年一月一〇日

- 二月一日
 - ・ブエズ、クリストファーのレバノン無視のあり方を非難。
- 二月二日
 - ・西岸、ヘブロン地区、バスへの攻撃。ガザで、二つの爆弾攻撃。
 - ・アラファト・ラビン会談(本文参照)。
- 二月三日
 - ・西岸、バスへの攻撃、一人負傷。ガザ、救急車で軍用車に突撃。主体は死亡、兵士三人負傷。別に、軍と交戦。パ人二人死亡。
 - ・シャファイ、アラファトは二三日を聖なる日とよんでいたが、もともと、和平にはつながらない合意だった。
- 二月四日
 - ・ガザ、銃撃戦と車爆弾、パ一人死亡、兵一人負傷。ベツレヘムでは、特務のパ人への攻撃と人民の闘い。計二人死亡二人負傷。
 - ・ヤシン師、自治選挙参加を示唆(本文参照)。
 - ・アラファト、英国訪問。
 - ・アラフ、全被占領地からの撤退を基礎にした包括和平であり、部分的な解決はない。
 - ・国連総会、中東和平過程を二四二、三三八を基礎にすること(四二五を無視するものとして)採択。レバノンはこれを非難(本文参照)。

- 二月五日
 - ・ガザ、人民の闘い、一人死亡二〇人負傷。
 - ・被追放者一九七人帰還。住民も参加してキャンプの解体(本文参照)。
- 二月八日
 - ・ラマラ、人民の闘い、四人負傷。他方、特務の司令官は対テロ作戦の継続を宣言。
- 二月九日
 - ・オスロ交渉開始。
- 二月一九日
 - ・ガザ、人民の闘い、七歳の少年含め多数の逮捕。
- 二月二〇日
 - ・南部、レジスタンスの攻撃。イスラエルの空爆。
- 二月二二日
 - ・ペイルスト、カタエブ本部で爆発、三人死亡一三〇人負傷。
- 二月二四日
 - ・南部、レジスタンスの攻撃、SLA一人負傷。
 - ・ラマラ地区、入植者への攻撃、二人死亡。
 - ・M・ザハル(追放者の一人)、ハマスは選挙に参加する可能性もある(本文参照)。
- 二月二三日
 - ・ハマス声明、ラビンが入植者の武装解除を表明すれば、入植者への攻撃を再検討すると揺さぶり(本文参照)。
 - ・シリア、ラビン政権のゴランへの入植拡大予算を非難。
 - ・レジスタンスの攻撃(四つ)、SLA一人死亡六人負傷。
- 二月二四日
 - ・ガザ、軍用車への攻撃。中佐が死亡、少佐など三人負傷。軍の乱射でパ人一人死亡。

- 二月二六日
 - ・南部、レジスタンスの攻撃、イスラエル兵一人死亡。
 - ・西岸、入植者、一〇家族が侵入。
 - ・M・ザハル、軍を全面撤退し、獄中者を解放すれば、攻撃を停止する用意あり。
 - ・ハッサン皇太子、ボイコットの解除は時期尚早。包括的和平の達成まで継続すべき。
 - ・南部、レジスタンスの攻撃(三つ)、SLA一人死亡二人負傷。
 - ・シリア紙、ゴランや被占領下のアラブの領土から入植地を撤去せよ。
- 二月二七日
 - ・ガザ、ファタハ指導者三人が辞任。
 - ・シャラー、ヨルダン訪問。アサド・クリントン会談が正当で包括的な解決へと推進することを期待する。
 - ・南部、レジスタンスの攻撃。他方、イスラエルは国連軍ノルウェイ兵パトロールを砲撃、一人死亡一人負傷。国連&ノルウェイ、イスラエルに抗議。
- 二月二八日
 - ・ガザ、帰還した追放者の歓迎集会。
 - ・南部、レジスタンスの攻撃、イスラエル兵負傷。他方、イスラエルは空爆。二市民死亡。
- 二月二九日
 - ・被占領地、軍用車への攻撃&入植者への攻撃、入植者重傷。攻撃したパ人も射たれて負傷。
 - ・シユカイラット、九・一三合意の後も、イスラエルはパの土地を接収している、と非難。

・シャファイ、われわれは交渉を、拙速な決定ではなく、もっと準備のあるものに援助できる。決定過程をもっと幅の広いものに、とPLOの民主改革の必要性を強調。

・カイロ交渉、ペレス(アブ・マーゼンと共同記者会見で)、「理解の書面」に至った。しかし、この「理解」を巡って対立に。

・アラファト、ムバラクと緊急会議。

・レバノン治安当局、モサドと絡んでいる「破壊活動ネットワーク」を摘発。

・レジスタンスの攻撃(二つ)。

二月三〇日

・ガザ、軍用車への攻撃。二兵士負傷。

・アラファト、突然、アンマンを訪問。ヨルダンとの関係改善を策すが、逆に非難を生む。

・南部、レジスタンスの攻撃、イスラエル兵一人負傷。他方、アブ・ムサ派、ガリリーへの浸透作戦、発見され、三人死亡。

・イスラエルIIパチカン国交へ。パレスチナ、アラブ社会からは激しい非難。

二月三一日

・改革派代表団、アラファトが代表団との会談を受け入れたのは事態の深刻度を示す。会談が肯定的なものであることを望む。

一九九四年

一月一日

・ファタハ二九周年。ガザ、人民の闘い、五人負傷。ジャーナリスト七人が殴られたり、記者章を取り上げられるなど。

・シャファイ、入植地を建設し続けるかぎり、和

平などないし、共存や合意の成功はない。

・フセイン王、アラファトを非難(本文参照)。

・南部、レジスタンスの攻撃。

二月二日

・被占領地、人民の闘い、六人負傷。

・改革派代表、アラファトと会談(本文参照)。

一月三日

・ガザ、爆弾攻撃、イスラエルの二人負傷。他方、人民の闘いで、パ人三人射殺された。

・ハード中東歴訪開始、ベイルートに。

・ムサ、イスラエルは自治さえ実行する気がないのでと疑わせる。

一月四日

・エルサレム、家屋破壊と入植活動。

・ハッドム、アサドIIクリントン会談で、包括的な和平と安保理決議の実行への進展に期待する。パ合意は個別的部分的な解決は正当な

平和、解決をもたらさないことが証明された。

・南部、レジスタンスの攻撃。

一月五日

・ガザ、占領軍への攻撃。逆に一人射殺された。

・シリア&レバノン交渉団長、国務省高官と交渉の再開に向けた討議。

・国務省、PLOの米内活動制限は活きている。対して、アラブ系米人が、政府批判。

一月六日

・エルサレム、占領軍への攻撃。一人負傷させたが、攻撃者は射殺された。

・PLO改革派、アラファトのクーデターを阻止した、が、会談に示された対応を批判。

・一〇組織、基本綱領を採択(本文参照)。

・ハラウイ、四二五の遵守を。被追放への対応などにも示されたように、レバノンは領土、主権を叩き売りしない。

・南部、レジスタンスの攻撃。イスラエル機、ナーメのGC基地を空爆。

・ハード、ガザを訪問。占領を終わらせる時は来た。軍事占領は人権の否定である。

一月七日

・パ獄中者一〇一名の釈放。

・ヨルダンII PLO、経済合意に調印。

・執行委、反対派や独立人士に会議と対話をよびかけ。対して、PF副議長、アラファトのよびかけは政治的な感わせ、と批判。

一月九日

・米議会代表団、イスラエル不明兵士問題でシリア訪問。

・カリキリア地区、ファタハの三人が辞任表明(本文参照)。

・タマスカス宣言諸国外相会談(本文参照)。

・ハズバラ、米はイスラエル寄りの政策展開をし、われらが人民を殺害し破壊するための最新鋭の武器を供給し続けている、と米当局者との会談を拒否。

・南部、レジスタンスの攻撃。

一月一〇日

・ガザ、手投げ弾攻撃、イスラエル兵一人負傷。

・タバ交渉再開(本文参照)。

・米議会代表団、ベカーへ。しかし、外務省に連絡なしに來たと、ブエズが批判。

・ガザ、手投げ弾攻撃、イスラエル兵一人負傷。

・タバ交渉再開(本文参照)。

・米議会代表団、ベカーへ。しかし、外務省に連絡なしに來たと、ブエズが批判。

・ガザ、手投げ弾攻撃、イスラエル兵一人負傷。

・タバ交渉再開(本文参照)。

・米議会代表団、ベカーへ。しかし、外務省に連絡なしに來たと、ブエズが批判。

・ガザ、手投げ弾攻撃、イスラエル兵一人負傷。

・タバ交渉再開(本文参照)。

・米議会代表団、ベカーへ。しかし、外務省に連絡なしに來たと、ブエズが批判。

・ガザ、手投げ弾攻撃、イスラエル兵一人負傷。

・タバ交渉再開(本文参照)。

・米議会代表団、ベカーへ。しかし、外務省に連絡なしに來たと、ブエズが批判。